

---

# s k e t c h

月姫

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

sketch

### 【Nコード】

N3077B

### 【作者名】

月姫

### 【あらすじ】

平次と和葉が主役の極々短いシリアスストーリー。1話完結のオムニバス風です。

sketch

K N E L L

今にも泣き出しそうな空に、寂しげな鐘の音が響いている。  
街外れにある小さな教会に集っているのは、故人の縁者たち。

その光景を少し離れた所で見ていた平次に、故人の妻がそつと声をかけた。

「探偵さんも、花を手向けてやっただけませんか？」

棺に眠るのは、今回の依頼人だった老人。

依頼の完了を確認すると、まるで眠るようにこの世を去った。

手渡された花を手向けて、平次は静かに頭を垂れた。

「ええ顔してはりますね……」

「探偵さんが、あの人の気掛かりを解いて下さったから……」

平次の言葉に、老婦人は頬を伝う涙をそつと抑える。

黒いベール越しに、その瞳が柔らかく笑んでいることがわかった。

哀しくないわけはない。

ほんの数日触れ合っただけの平次から見ても、とても仲の良い夫婦だったのだから。

きつと、その哀しみすら愛しく思える程に満たされていたのだらう。

s k e t c h

「これで失礼します」

「有難うございました」

暇を告げる平次に、老婦人は改めて深々と頭を下げた。

教会の傍にとめてあったバイクを、平次はそのままゆっくりと押し始めた。

故人との別れを惜しむ人たちの邪魔をしたくなかったのだ。

教会からのなだらかな坂道を下りる平次の背を追うように、教会の鐘の音が響く。

いつか、自分の人生が終わる時に、あの老人のように穏やかな心で逝きたいと思う。

だが、探偵などしている自分には難しいだろうと思いついて、平次は小さく苦笑した。

ただ、自分を送る人たちには、自分はそれでも満足しているのだと伝えたい。

そして、今はまだ考えたくもないが、彼女が逝く時には満ち足りた人生だったと思つて欲しい。

願わくは、自分の傍らで。

そこまで考えて、平次は何かを振り切るように大きく息をついた。

未だ自分の感情を持て余して彼女の心を確かめる事すら出来ずにいるのに、何を勝手な事を考えているのか。

「……らしくないで」

自分に言い聞かせるかのように呟いて、平次はバイクに跨った。

s k e t c h

s k e t c h

**K N E L L (後書き)**

『弔いの鐘』

今回の依頼は多分、血生臭い方ではなく、謎解きのよつなものだったと思います。

## 雪景色

「あ……雪……」

朝からどんよりと重く垂れ込めて、空を薄墨色に染めていた雲から、堪えきれなくなったように大きな雪片が舞い落ち始めた。

ちらちらと。

はらはらと。

けれど、少し重たげに。

それは見る間に量を増していく。

「平次！雪！」

居間の炬燵で寝そべっている平次の手から雑誌を取り上げた和葉が、窓の外を指差した。

ため息一つついた平次が、億劫そうに起き上がる。

一枚だけ開けられた障子の向こう、縁側のガラス越しに見える庭は、早くもうつすらと雪化粧をしていた。

「積もるかなあ」

楽しげに庭を見やる和葉に、平次が少し意地悪そうな笑みを浮かべた。

sketch

「雪触って、冷たい言うて泣いたヤツの言うセリフやないで？」

そのセリフに和葉がくるんと振り向いて、負けじと意味深な笑みを返す。

「……庭で、枝から落ちてきた雪、頭から被って泣いてたんは、どこのお坊ちゃまやったかなあ？」

睨みあう……もとい、見詰め合う事2秒。

無言の内に、この話題は終了だと暗黙の了解を取り付けて、二人同時に庭へと目を移した。

お互いに、雪を見るたびに親たちから話を聞かされて、自分自身の記憶にはないこんなエピソードまで知っている。

記憶を辿れば、雪合戦をしてはしゃいでいた翌日に、仲良く風邪をひいて寝込んだ事や、まだ誰も踏んでいない雪を見つけては、どっちが先に足跡を付けるかで喧嘩した事なども思い出せる。

静かに降り積もる雪を、ただ黙って二人で眺める。

二人で共有してきた幾つもの出来事。

次に思い出す時にも傍に居るのはお互いであって欲しい。

同じ願いを抱いている事を、二人はまだ知らない。

s k e t c h

雪景色（後書き）

冬休み、服部家の居間にて。

こたえ

時々訊かれる事がある。

「いつから好きやったん？」

その度にオレは首を傾げる。

「わからん」

そうすると、大抵の場合は呆れたように笑われる。

「オマエ、ちゃんと恋愛したんのか？」

そう言われても、オレには『ちゃんとした恋愛』の定義がわからないから、答えようが無い。

そもそも『恋』と『愛』の違いもわからない。

『好きか嫌いか』と問われれば、今までだって間違いなく『好き』だったと答えるが、それが質問してくる連中の欲しい答えじゃない事もわかってる。

『愛は真心、恋は下心』

前に誰かとの雑談の中で聞いた話。

『愛』という文字は真ん中に『心』があり、『恋』という文字は下に『心』がある。

なるほどなとも思ったが、ただの言葉遊びにも聞こえた。

「オマエがそんなじゃ、彼女が不安がるんとかやうか？」

そうまで言われれば反論もしたくなるが、オレが和葉に対して抱いている感情を説明しようとしても、結局はどの言葉も当て嵌まらない気がして、沈黙するしかなくなる。

ただ言えるのは、今も、これからも、和葉が好きだと言う事だけだ。

それだけじゃいけないだろうか？

どこからどこまでが『兄妹』の好きで、どこからどこまでが『幼馴染』の好きで、どこからが『恋人』の好きなのか、分けなきやいけないのだろうか？

ぐるぐると考え込んでいたら、和葉があっさりと答えをくれた。

「アタシも、そんな区別つけられんよ？今やって、全部の好きが混じっとるもん。せやから、これからもずっと、アタシの事一番に好きでいてくれれば、それで充分やよ？」

s k e t c h

こたえ（後書き）

平次にとっての和葉。  
和葉にとっての平次。

『幼馴染み』で『兄妹・姉弟』で『恋人』。  
それは二人にとっては矛盾する事なく持ち続けられる感情だと思う。  
将来そこに『夫婦』という関係が加わったとしても。

r a i n y d a y

今日は朝から雨。

酷くはないけれど、しとしとと降り続いて、止む気配もない。

「……梅雨やもんな」

窓ガラスを伝って落ちる雨粒を、目で追ってみた。

小さな水滴が少しずつ集まって、つうつと、流れ星みたいに尾を引いて落ちていく。

「……今、何処に居るんやろ……」

この部屋の主は、依頼が入ったとかで、昨日から留守にしている。

「ちゃんとゴハン食べとるかな……」

時計の針は丁度お昼。

普段はきっちり食べるクセに、一つの事に集中すると食事も睡眠も忘れてしまうから、少し心配になる。

……ほっとした瞬間に、思い出したように騒ぎ出すけれど。

「昼ゴハン、どうしようかな……」

オバチャンは、急な用事が入って夕方まで帰って来ない。

『適当に食べとってな』って言われたけど、あんまりお腹は空いてない。

「どっしょよっかな……」

ぼつと雨を眺めてたら、何となく眠くなってきた。

このまま寝てしまふのもいいかもしれない。

そう思っつて、ベッドに寄り掛かったままうつうつとしていたら、玄関の引き戸が開く音がした。

オバチャンが帰って来るには早すぎる。

という事は、どっやら、この部屋の主のご帰還らしい。

「お昼ゴハン、もう食べたんかな？」

時計の針は、お昼をちよつと過ぎただけ。

今帰つて来たつて事は、きつとお腹を空かせてる。

今日はちよつと寒いから、温かいうどんもいいかもしれない。

アタシはそれで十分だけど、『育ち盛りの食べ盛り』と主張するヤツには、多分ちよつと足りない。

……多分じゃなくて、絶対足りない。

確か、昨夜のゴハンが残ってるつてオバチャンが言つてたから、チャーハンも作ろうかな。

うどんならおにぎりの方が合いそうだけど、残りゴハンはチャーハン向きだし、まあいいや。

階段を上つてくる足音が、少し疲れてる。

アタシがこの家に居る事には気付いてる筈だから、きつと、顔を見たとたんに、ヤツはただいまも言わずにお腹が空いたと騒ぎ出す。

「まずはお腹一杯にさせて、それから『お帰り』と言ってやるわ。  
『ただいま』と言った後に『眠い』って言い出すだろっけど。」

「……まあ、ええか」

今日は雨。

出掛けるには少々億劫だし、おやつの間までは寝かせてあげよう。

部屋の引き戸が開けられる。

アタシの顔を見て、開口一番、ヤツが言ったのは……。

## 蒼い月

冴えた月光が、カーテンを開け放した部屋を蒼白く染め上げている。

夜が一番深い時間。

床に座り込んだ和葉は、ベッドに凭れて、その熱を持たない光を浴びていた。

「水ん中に居るみたいや……」

小さな呟きは、まるで泡のように唇から零れると同時に消えた。

彼は、まだ戻らない。

いつもの事だ。

親の庇護下にあった頃も。

独り立ちをした頃も。

こうして一緒に暮らすようになってからも。

彼が家を空けるなんて、いつもの事なのだ。

わかってはいても、湧き上がる不安と寂しさを抑える事は出来ない。

ほろっと、小さく息を吐く。

彼に憧れる女性むすめは多い。

時折、負の感情を持った視線が自分に向けられている事に、和葉も気付いている。

けれど、彼女たちは知らないのだ。

彼の心を手に入れるのと同時に訪れる、このどうしようもない程の不安を。

「警沢やって、わかってるけど……」

以前は、よく彼について行った。

彼も、それを許してくれていた。

でも今は……。

彼が依頼料を受け取るようになってからは、ついて行きたいとは言えなくなつた。

もし言えたとしても、彼はきつと許してはくれないだろうとも思っている。

「せやけど……」

フローリングの床に触れている指先から、少しずつ熱が失われていく。

窓ガラスを通して忍び込んでくる冷気は、冬が近い事を告げていた。

「……………寒いんよ」

『寂しい』とは言えない和葉の精一杯の言葉は、受け取るべき主のないままに、ただ闇の中を漂っていた。

s k e t c h

s k e t c h

蒼い月（後書き）

大学2年、晩秋。

## 皓い月

急ぎの依頼が舞い込んで少し遠出をした先で、平次にとってはさほど難しくはなかったその依頼を解決した矢先に別の事件が発生して、足止めをされているうちに日付が変わっていた。

もっとも、事件を前にして平次が素通り出来るはずもなく、駆けつけた刑事達の中に見知った顔があった事もあって、自ら捜査に加わっていたのだが。

事件も解決し、ようやく静けさの戻りつつある依頼人宅の手入れの行き届いた庭で、平次は小さく息をついた。

「昨日のうちに戻るつもりやったんやけどな……」

低い咳きは、誰の耳にも届く事無く消えて行く。

日付が変わってももう2時間以上経っている。今からバイクを飛ばして帰ったとしても、着くのは明け方になるだろう。

いつもの事だ。

親の庇護下にあった頃も。

独り暮らしを始めた頃も。

彼女と暮らし始めてからも。

事件だと言っては飛び出して、朝帰りになるなど、いつもの事なのだ。

けれど、急ぎ立てられるような感情を抑えられない。

事件に向かっている時には感じる事のない、焦りに似た感覚。

自分を落ちつけるように大きく深呼吸をして、平次は空を見上げた。

どこまでも澄み渡った夜空には、皓<sup>しろ</sup>く輝く月。

熱を持たないその光に心の奥底まで見透かされているようで、平次は思わず苦笑した。

以前なら、彼女は依頼で遠出する平次について来た。

平次も気軽に連れ歩いていた。

けれど、平次が依頼料を受け取るようになってからは、彼女はついて行くとは言わなくなった。

平次も、一緒に行くかとは訊けなくなった。

「別に、今までやって遊びで依頼受けてたワケやないけどな……」

それでも、金銭の授受がある以上、はじめとして、プライベートとは切り離すべきだと思ったのだ。

「我俣やって、わかっとなる……」

彼女と離れている事に耐えられずに、半ば無理矢理に引き寄せたのは自分だ。

「それでもな……」

彼女に甘えているのだと、平次にもわかっている。

今まで以上に彼女を独りにしてしまっている事も、我慢を強いているだろつ事も。

以前には気付けなかったそれらの事がわかるようになったからといって、何かしてやれるほど自分は大人ではない事も、わかっ

s k e t c h

る。

「もう少しだけ、甘えさせてくれるか？」

小さく告げた言葉は、夜風に溶け込むように消えていった。

s k e t c h

暗い月（後書き）

「蒼い月」と対。

## そして、家族

君が生まれた日の事を、いつか話す時が来るだろうか

暫く抱えていた事件に何とか解決の目処をつけて家に帰り着いた時、時計は既に23時近くを指していた。

「ただいま」

「お帰りなさい。お疲れ様」

玄関を開けると、車のエンジン音で気づいたのだろう妻が出迎えてくれた。

「晩ゴハン食べたん？」

「追い込みかけとって、喰っとるヒマなかったわ……」

ため息まじりに言って、妻に荷物を預けて風呂に向かう。

ゆっくりと湯に浸かって身体を解しているうちに、何か仕度してくれるだろう。

用意されていた着替えに腕を通して洗い髪を拭きながら居間に入ると、柔らかな湯気越しに今朝はなかったはずのものが目に飛び込んできた。

「どうしたんや、それ？」

オレの指差す先には、ダイニングテーブルの片隅に飾られた、小さな笹。

「今日、幼稚園で作ったんやて。よく出来とるやろ？」

オレに冷たい麦茶を差し出しながら、妻が優しく笑う。

まだ幼い手で、懸命に鉄や糊を使ったのだろう。

大きさも不揃いで所々糊のみ出した跡のある輪飾りや、不思議な形をした短冊が、重たげに、けれどどこか誇らしげに小さな笹を彩っている。

「今日は七夕やったな……」

忘れていたわけではないけれど、改めて今日の日を口にしてみた。

「今日、また1つお姉さんになったんやね」

「1年なん、早いモンやな」

妻と顔を見合わせて、笑みを交わす。

7月7日。

七夕の夜に生まれた娘。

あの日は、梅雨時期にしては珍しく、気持ち良く晴れていた。

仕事を片付けて病院に駆けつけたオレを待っていたかのように、娘は産声を上げた。

ベッドで疲れた身体を横たえている妻の、満足げな幸せそうな微

笑み。

初めて腕に抱いた娘の、温かな重み。  
窓の向こう、雲1つない夜空を彩っていた天の川。

自然と、感謝の言葉が零れていた。

オレの娘を産んでくれた妻に。  
生まれてきてくれた娘に。  
未熟なオレたちを支えてくれている人たちに。

「娘の誕生日にちゃんとプレゼントも渡せんかったんは、父親としては減点モンやな」

う。  
少しだけ落ち込む素振りをしたオレに、妻は小さく声を上げて笑う。

「そうやねえ……。ちょっとだけ減点やけど、子供は子供なりにわかつとるから、大丈夫やない？アタシらやって、そうやったんやから」  
「なら、今のうちに挽回しとくか」

妻がオレの上着のポケットから出しておいでくれた、小さな包み  
中には、綺麗な刺繍の白いレースのリボン。  
妻に似た娘には、きっと良く映えるだろう。

眠っている娘を起こさないようにそつと部屋に滑り込んで、サンタクローズよろしく枕元にプレゼントを置く。

「ハッピーバースデー、綾乃。起きた時に、ちゃんと気いつけや？」

s k e t c h

た。  
あどけない寝顔を見ながら囁くように告げて、静かにドアを閉め

そして、家族（後書き）

幼馴染から恋人へ、やがて少しずつ両親の元から巣立って独立し、家族となる。

その時間の流れの中の、ほんの一瞬を並べてみました。

内容的にはまだまだ書けると思いますが、一応ここで完結です。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、元々は独立した小唄（「月」2作は一応対になってました）ですが、1つの流れに沿って編集する事で月的にも新鮮な気持ちになれました。

次回もまた、以前書いたものからの投稿になりますが、読んで頂けると嬉しいです。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3077b/>

---

s k e t c h

2009年5月29日04時20分発行